談話から見る黒島方言の目的語標示

原田走一郎
haradaso@ninjal.ac.jp
2016 年 9 月 20 日「危機言語」プロジェクト研究発表会　於国立国語研究所

1. はじめに

本発表は、南琉球八重山黒島方言（以下、黒島方言とする）の格標示について、談話資料を基に考察するものである。自動詞他動詞主語、目的語を対象とするが、主に目的語の標示を扱う。

黒島方言の目的語標示については助詞 ju と ba と無助詞、そしてその他のとりたて助詞の可能性がある。以下、ju、ba、無助詞の例を示す。

(1)　ju の例

a. （ハブを発見してそれを石でおさえていたが）

junu　isi=ju　turun=ti　izi　foorita=waja
同じ　石=ju　とる=QUOT　言って　食われた=SF
（ハブを殺そうと、）同じ石を取ろうとして咬まれたよ

b. aikka　unu　mai=nu　ubon=ju　uva=n　taboora=ti
そしたら　この　米=GEN　ご飯=ju　2.sg=DAT　給わろう=QUOT
じゃあこのおにぎりをお前にやろう

(2)　ba の例

a. X=nin　pataki=ba　sooretaana　mazun　siirun
人名=みたいに　畑=ba　ならしながら　一緒に　する
X さんみたいに畑をならしながら一緒にする（このような気持ちが大事）

b. tarai=na　sentakumunu=ba　iriti　haara=ha
たらい=LOC　洗濯物=ba　入れて　川=ALL
たらいに洗濯物を入れて川へ

(3)　無助詞の例

a. ubuza=a　jama=ha　<u>ki φ</u>　tur-i
おじいさん=TOP　山=ALL　木　とる-INF
おじいさんは山へ木をとりに

b. reezooko=ti　iz-u　<u>munu φ</u>　naan-iba
冷蔵庫=QUOT　言う-NPST　もの　ない-CSL
冷蔵庫と言うものはないので

本発表では、上の例のような、主語や目的語の後に助詞がない状態を無助詞と称し、あ

えて記号としてあらわしたい場合は「ϕ」を用いる。

本発表ではまず、黒島の格標示に関する先行研究を見る。次に、黒島以外の八重山語諸方言の格標示に関する研究を概観し、八重山語全体の特徴をつかむ。続いて、談話資料から黒島方言の格標示について観察する。

結論を先に述べると、黒島を除く八重山語諸方言においては目的語の標示は無助詞であることが基本とされるようであるが、黒島方言についてはそうではない、ということを述べる。

2. 先行研究

本節においては、先行研究のまとめを行う。まず、2.1 においては黒島方言の格助詞に関する研究、続く 2.2 においては他の八重山語諸方言に関する研究をまとめる。

2.1. 黒島方言の先行研究

黒島方言に関する先行研究はそもそも少ないものの、黒島方言の格助詞に関しては、中松 (1976)と野原 (2001)がある[1]。それぞれまとめる。

2.1.1. 中松 (1976)

本節では中松 (1976) による黒島方言の格助詞の記述をまとめる[2]。まず簡単に同研究による主語と目的語の標示についてまとめておく。

(4) 中松 (1976) のまとめ

A：ϕ（nu の例が見当たらない：原田注記）

O：ϕ、wa

S：nu、ϕ、wa

中松 (1976) では形式ごとに用法が示されている。以下、ϕ（ゼロ）、nu、wa の 3 つをとりあげる。

---

[1] 主格の格助詞 ga が中松 (1976) 、野原 (2001) の両方で報告されているが、中松 (1976) では「不活発」で「化石的」とされ、野原 (2001)では「他の方言の影響かもしれない」とされている。発表者も ga という格助詞は聞いたことがないため、本発表では省いている。ただし、代名詞の主格形、たとえば 2 人称単数主格形の uvaa などは*uvaga に由来するものと考えられる。これは、黒島方言の指小辞-ama の例などと同じく、宮古語の ga と対応するためである。なお、それぞれの先行研究の一部の表記を改めている。

[2] ちなみに、この中松 (1976) が対象とした黒島方言は本当に発表者が研究の対象にしているのと同じ黒島方言なのか、という疑問がある。同論文にはどのような人からこれらの情報を得たのか記されていないが、ぜひ知りたい。たとえば、(5a) にあるように「母」を意味する語が aRfa とされているが、発表者の知る限り黒島方言の「母」は abu であり、平山など (1967) においても同様に abu とされている。

(5) 格助詞 φ（ゼロ）

a. aRfa<u>φ</u> uwa<u>φ</u> jarabiN （お母さん（が）おまえ（を）呼んでいる）

b. uwaR<u>φ</u> jaR （君（の）家）

c. jaNduR<u>φ</u> fui （戸（を）閉める）

(5a)は主格を、(5b)は所有格を、(5c)は目的格をあらわすとされている。これらの記述のうち、すくなくとも(5b)については問題がある。発表者の調査では 2 人称は uwaR ではなく uva であるが、確かにこれは uvaa jaa「あなたの家」というかたちで所有を意味する。しかし、uvaa というように長音化するのがふつうであるため、a なりを所有の標示として考えるのが妥当であろう。

(6) 格助詞 nu

a. panaR <u>nu</u> naharu （羽が長い）

b. moR <u>nu</u> muiruN （森が燃える）

c. taka <u>nu</u> maitaraR garasuN mairuN （タカが舞ったら、カラスも舞う）

d. kiR <u>nu</u> naru （木の実）

(6a-c)は主語を、(6d)は連体修飾語をあらわすとされる。他動詞の例は掲載されていない。

(7) 格助詞 wa

a. caR wa ciR （茶をつぐ）

b. ffa wa mui （草が生える）

この wa については「黒島方言には、目的格をあらわす助詞が現在して、活発にはたらいている」とされている。(7a)は確かに目的語を標示しているようであるが、(7b)は自動詞の主語を標示しているようである。そのため、中松 (1976)では明言されてはいないが、本発表ではこの wa は目的語のみならず、自動詞主語も標示するものと考える。

以上のように、中松 (1976) において示された黒島方言の格標示は例数が限られたなかでも複雑な様相を呈しているといえる。S 標示は nu、wa、φ の 3 つ、P 標示はφと wa の 2 つの選択肢があるものと思われる。

2.1.2. 野原 (2001)

野原 (2001) においても、それぞれの形式の用法ごとに分類が示してある。先に概要をまとめておくと、以下のようである。なお、同論文には無助詞に関する言及はない。

(8) 野原(2001)のまとめ

A：nu

P：ju、ba

S：nu

以下、nu、ju、ba に関する記述を抜粋する。

(9) 格助詞 nu

a. nabi<u>nu</u> suku（鍋の底）

b. unnu　maahattasaa（芋のおいしかったことよ）
c. batanudu jamu（腹が痛い）
d. pannu bun（ハブがいる）
e. kureenu sikkaa deezina kutu narundoora（あれがすると大変なことになるよ）
f. tusinu turuka sigutun dekunun（年を取って仕事も出来ない）
g. sitanu amahadoraa（砂糖は甘い）

(9a-b)は連体修飾、(1c-e)は連用修飾としてある（f と g に関しては記載なし）。連体修飾用法の下には所有・所属、状態、などの分類があるが詳細は省略する。(9b)は「詠嘆的」、(9f)は「ヲの意」、(9g)は「ハの意」としてある。この記述から、格助詞 nu が自動詞主語（(9d)）と他動詞主語（(9e)）をマークするということは少なくともわかる。(9f)に関しては、「ju の環境による変化か不明である」としてあるため、本発表では nu の用法としては扱わない。

(10) 格助詞 ba
a. hjakujennu munuba　haiti jurukubibee（百円の物を買って喜んでいるよ）
b. baa umuttiiba　miribetta（私の顔を見ていた。ba を ju に置き換えてもよし）
c. patakinaa　jasaiba sukuribun（畑に野菜を作ってある）
d. ubuzaa pitturupin guusitankabadu numi　waaru（お祖父さんはしょっちゅう酒ばかりを飲んでおられる）
e. nahantuba tuuriasunha patta（仲本を通って東筋へ行った）

格助詞 ba については、動作、作用の目的と経由という下位分類が示してある。(10a-d)は動作作用の目的の用例であり、(10e)は経由の用例である。この記述から、ba が目的語の標示として用いられていることがわかる。

(11) 格助詞 ju
a. pasiju sukurun（箸を作る）
b. baa umuttiiju miribetta（私の顔を見ていた。ju は ba でもよし）
c. izaa kjuujun　zaakoho waarehen（お父さんは今日をも仕事にいらっしゃった）

格助詞 ju については動作、作用の目的という用法のみが設けてある。つまり、ba と比べて経由の用法がない、ということであろう。ただ、本発表ではこの点については以後触れない。(11c)については「jun はヲモに当たる形である。その意だと共通語として理解しやすいが、ヲモで目的の意も類似の意もあるのであろう」と述べられている。

黒島方言の格に関する先行研究を 2 つ見たがかなり異なる記述が示してあることがわかる。

2.2. 黒島を除く八重山語の先行研究

続いて、黒島以外の八重山語諸方言の格標示に関する先行研究をまとめる。本発表で扱う地点は以下の地図のとおり（竹富島は黒島と石垣島の間の島）。

図 1 今回扱う地点

2.2.1. Lawrence (2012) による鳩間方言の記述

Lawrence (2012) によると、鳩間方言の主語は nu かゼロで標示され、nu が無標（つまり普通）である。ゼロは、主語が以下の場合に用いられる：1、2 人称代名詞、unaa という再帰代名詞（duu は異なる）、「誰」「どこ」という疑問代名詞（「何」「いつ」は異なる）、人の下の名前（名字は異なる）、-taa 及び-caa を用いた複数形名詞（-Nkee、-numee は異なる）、特定の個人を指示する場合の地位をあらわす語（市長など。ただし一般的な意味の場合は異なる）、一部の親族名称（母、父、姉、叔母、叔父）。

目的語の標示は随意的であるとされている。用いられた場合は ba が、そして文語的な場合に ju が用いられるとされている。また、この ba は 1 例の固定化された表現（maa-ba sikibu「悪霊がついている」）において、（自動詞）主語に後続するともされている。

2.2.2. 宮城 (1992) による石垣方言の助詞「ユ」に関する研究

宮城 (1992: 1) は石垣方言（石垣島の字石垣のことか）で用いられる助詞「ユ」について、「単なる目的を表わす格助詞ではなく本来は強意を表わす間投助詞なのである」と述べている。この理由として、格助詞のあとにこの「ユ」がたちうること（たとえば「～からユ」）、また「強意の係助詞ドゥ」との相補的な分布（述部が命令形の場合、または未然形を用いる意志や勧誘の場合はドゥを用いることができず、「その代りに間投助詞ユを用いる」）を

挙げている。つまり、宮城 (1992) に従うとすると、石垣方言の目的語の標示は無助詞であり、なんらかの理由で「ユ」があらわれることがある、ということのようである。

2.2.3. 宮良 (1995) による石垣島石垣方言の記述

宮良 (1995: 179-180) によると主格は nu であるようである。一方、目的語の標示については、「八重山石垣方言を含む琉球方言では「対格」を標示する助詞を欠いている (宮良 1995: 174)」と述べられている。目的語に後続する「yu」と「ba」があるようだが、これらが必要とされない例文を挙げ、それを理由に「格助詞とは無関係で、単に先行する名詞を強調する機能をもち、随意的な要素である (宮良 1995: 174)」としている。「yu」「ba」の使い分けについては言及がない。なお、石垣方言の記述である上記宮城 (1992) と基本的には目的語が無助詞である、という点においては共通している。

2.2.4. 伊豆山 (2002) による石垣宮良方言の記述

伊豆山 (2002: 359-361) によると「「が」相当の助詞は nu だけである」とあるため、主格助詞は自動詞他動詞に関わらず nu のようである。

「「を」相当の助詞 ju は、特別な時以外、現れない。(伊豆山 2002: 360)」とあるが、詳細はわからない。ただし、「ju-N（をも）は現れる」とあり、「も」が後続する場合は ju が必須となるようにも読める。

また、「格助詞「が」「を」双方の位置に現れる ba がある。これは du と共に出現することが多い」と述べられており、「おそらく格助詞ではない」とされている。「主体」をあらわす場合は、「主体が物でしかも話し手にとって望ましくない時」とされている。このことから、「が」相当とはいえ、多くは無生の自動詞主語であろうと予想される。あげられている例文は「雨が降る」や「雑草の草が咲く」などである。

2.2.5. 金田 (2009) による西表祖納方言の記述

同論文によると、「主語と補語がともにハダカであらわれたばあい、主語・補語という語順をとるのが基本である (金田 2009: 29)」とされている。このことから、主語、目的語共に無助詞が可能であること、名詞句に後続する助詞のみならず語順を用いることによっても格標示がなされていることがわかる。また、目的語は無助詞であることが基本であるものの、「バ」も用いられることが述べられている。この「バ」は「対格であることを明示しながら強調する 」、「対格専用の強調辞である (金田 2009: 36)」とされている。さらに、主節の主語では「ハダカ格」が基本であるとされ、「ヌ格」の場合は強調的であるとされている。

2.2.6. 中川・タイラー・田窪 (2016) による白保方言の記述

中川・タイラー・田窪 (2016: 39-40) によると、白保方言の主格は（代名詞を除くと）「nu」であるが、S は「特に非対格のとき無標のこともある」とされている 。また、対格は無標

であることが多いが、「ju」による標示もあるとされ、「対格という関係性を明示するときや、対比（「A ではなく B を」）のときに使われると思われる (中川・タイラー・田窪 2016: 40) 」とされている。しかし、「ju」が常に対格を標示しているわけではなく S や A を表示しているような例もあると言う。一方、「ba」という形式もあり、これは「主に定（definite）の目的語に後続する (中川・タイラー・田窪 2016: 41)」と述べられている。つまり、白保方言の目的語の標示は、名詞句の役割識別（格関係の明示」）という観点と、名詞句の情報（対比や定）という点によって決定されている、ということがわかる。

2.2.7. Aso (2010) による波照間方言の記述

波照間方言の格標示は APS すべて無助詞であることが知られており、語順で文法関係を示すようである (Aso 2010: 200)。一方、「ba」も用いられるようであるが、これは目的語の主題標示であるとされている (Aso2010: 216)。

2.2.8. 西岡・小川 (2011) による竹富方言の記述

西岡・小川 (2011) によると竹富方言の主格は「ヌ」である。他動詞主語の例が見当たらないが、おそらく他動詞主語も自動詞主語と同じく「ヌ」であろう。主語に関しては無助詞が可能かどうかわからない。

動作の対象などを表す格助詞として「ユ」が示されている。しかし、「はっきりと動作の対象と分かる場合には省略されることも多い（西岡・小川 2011: 27）」とされており、目的語の無助詞も多くあることが示されている。

2.2.9. 八重山語諸方言の研究のまとめ

以上、黒島以外の八重山語諸方言の研究を概観してきた。簡単に表にまとめると次のページの表のようである。スペースの関係で主語をまとめ、目的語を別の表にする。

八重山語諸方言の他動詞主語については西表祖納と波照間を除いて、nu を基本としているようである。西表祖納と波照間は無助詞が基本のようである。ちなみに、これらの方言は、他動詞主語のみならず、目的語、自動詞主語についても同じく無助詞が基本のようである。

目的語については、無助詞を基本とするようである。そしてなんらかの条件のもと（たとえばスタイルの問題や情報構造上の問題など）、ju もしくは ba があらわれるようである。そしてすべての方言においてこのような目的語の標示の交替が観察される、という点は特筆すべきであろう[3]。

自動詞主語については西表祖納と波照間が無助詞を基本とするのを除けば、nu を基本と

[3] ただ、Sinnemäki (2014: 293) によると 223 の有形の目的語標示を持つ言語のうち 178 言語（80%）が、無助詞となんらかの交替を起こすらしい。また、目的語は常に無助詞、という言語も総サンプル 754 言語中 521 言語あるようである。

するようである。また、鳩間、宮良、白保では、一部の自動詞主語に nu 以外の ba や無助詞があらわれるようである。

表 2 八重山語諸方言の主語標示

	A		S		
鳩間	nu	ϕ	nu	ba	ϕ
		代名詞など		固定的表現	代名詞など
石垣	nu		nu		
宮良	nu		nu	ba	
祖納	ϕ	nu	ϕ	nu	
		強調的			
白保	nu	ju	nu	ϕ	ju
				非対格	
波照間	ϕ	語順	ϕ		
竹富	nu		nu		

表 3 八重山語諸方言の目的語標示

	P		
鳩間	ϕ	ba	ju
			文語
石垣	ϕ	yu	ba
		強調	強調
宮良	ϕ	ju	ba
		特別なとき	
祖納	ϕ	ba	
		対格明示	
白保	ϕ	ju	ba
		明示、対比	定
波照間	ϕ	ba	語順
		主題	
竹富	ju	ϕ	
		省略	

表 4 黒島方言の談話中にあらわれた格標示

	A		P		S	
nu（主格）	nu	4			nu	87
	nu du	4			nu du	57
	nu du ka	1			nu du ka	1
					nu ka	1
代名詞主格形	代名詞主格形	24			代名詞主格形	23
ba（対格）			ba	149	ba	1
			ba du	10		
			ba ja	1		
ju（対格）			ju	48		
			ju du	2		
			ju a	1		
			ju n	13	ju n	7
					ju n ka	1
無助詞	無助詞	8	無助詞	67	無助詞	19
a（主題）	a	28	a	33	a	100
	a a	1			a a	2
du（焦点）			du	12	du	14
合計		70		336		313

まずは簡単に、表 4 からわかることを述べる。なお、中松 (1976) で報告されている wa は観察されなかった。

(12) a. 目的語は標示があらわれる場合が圧倒的に多い

b. ju と ba は主に目的語に後続するが、自動詞主語にも後続する

c. 主語の代名詞では（無助詞のように見える）主格形が用いられる

今回は（準備と発表の）時間の都合上、(12a) について以下、述べる。

3.1. 目的語の無助詞について

本節では黒島方言の目的語の無助詞について述べる。2 節で見たように、黒島方言を除く八重山語諸方言の目的語の標示は無助詞が基本であるようであった。しかし、談話資料から見ると黒島方言の目的語はなんらかの標示がなされることが多いようである。表 4 に示したものに他のとりたて助詞が後続した場合を加えると、今回の談話資料に合計 373 例の目的語があらわれた[4]が、そのうち 67 例が無助詞であった。これは全体の 18%に過ぎず、こ

[4] 表 4 に示した 336 例以外は、35 例の n「も」と 2 例の tanka「だけ」である。

れが基本であるとは言いにくい。ju のみが後続した場合（48 例）、ba のみが後続した場合（149 例）、そして無助詞の場合の合計（67 例）の合計（264 例）に対する割合をとってみても 25% ほどである。

だが、ba や ju が頻出したのには話題による影響などがあるのではないか、という反論も可能であろう。しかし、単純に数字の問題ではない、ということが無助詞の例の観察から言える。無助詞の出現には強い統語上の制限がかかっているのである。すなわち、無助詞の目的語は 67 例観察されたが、このうちの実に 63 例が動詞と隣接しているのである。たとえば、以下のような例である。

(13) a. uri=hara=n　ziisan=nu　kunu　patarakeeru　sugataϕ　bassunsukun
これ=ALL=も　じいさん=NOM　この　働いている　姿　忘れずに
gambari=joo
がんばる=SF
「これからもじいさんのこの働いている姿を忘れずにがんばりなさいよ」

b. jakujokuzjo=ha　miziϕ　iriru=wara
薬浴所=ALL　水　入れる=SF
「薬浴所に水を入れるよね」

c. 「カゴ」という漁法について話している
ai　uriϕ　sii=du　ai　izu=n　tanerasi=a　sjee=waja
そう　それ　して=FOC　そう　魚=も　根絶やし=TOP　している=SF
「そのようにそれ（カゴ）をして、そんなふうに魚も根絶やしにしているね」

これらのように、無助詞の目的語のほとんどが動詞と隣接している。この点は、松田 (2000) が指摘する東京方言の格助詞「を」のゼロ化と似ているといえる。

さらに、動詞と隣接していない 4 例のうち 2 例は ti izu munu「と言うもの」で終わる名詞句が目的語になっているものである。この ti izu munu「と言うもの」という主題をあらわす句に ju 及び ba が後続する例は見つからなかった。以下の 2 例が ti izu munu が目的語になり、無助詞で、かつ、動詞に隣接していないものである。

(14) a. juubinkoo=ti　izu　munuϕ　mee　duu=si　sukuraba=du　naru
郵便局=QUOT　言う　もの　FIL　自分=INST　作らなければならない
「郵便局を自分で作らなければならない」

b. aamuri=ti　izu　munuϕ　mee　duu=si=du　marasi
泡盛=QUOT　言う　もの　FIL　自分=INST=FOC　生まれさせ
「泡盛を自分で作って」

この ti izu munu が目的語になった例は上の 2 例も含めて 6 例あった。そのうち、2 例には主題の助詞 a が後続し、残る 2 例は上と同じく無助詞であったが、同時に動詞に隣接していた。以下に例を示す。

(15)　a. 主題の助詞 a が後続する例

mati=jo　mati=jo=ti　izu　munu=a　sikasi　keettakka=ra

待てよ　待てよ=QUOT　言う　もの=TOP　聞かせ　来たら=SF

「待てよ待てよ、ということを聞かせて来たら（ハブは逃げなかったかも）」

b. 無助詞かつ動詞に隣接する場合

manuma=nu　vaa　ma-nki=a　biaha　mukasi=nu

今=GEN　子　孫-PL=TOP　1.PL.EXCL　昔=GEN

soozibarai=ti　izu　munu φ　zan　pazi=doo

ソージバライ=QUOT　言う　もの　知らない　はず=SF

「今の子や孫はソージバライ（お産の際の習わし）と言うものは知らないはずよ」

このように、ti izu munu を含む句が無助詞になるのには動詞との隣接性とは別の要因がある、ということが言えそうである。

最後に残る 2 つの例をあげる。

(16)　a. 以前掘った井戸の話

uri φ　maruma　hangauka　maruma　futaci=nu　hoosu=si

それ　今　考えると　今　二つ=GEN　ホース=INST

「それを今考えると、今、二つのホースで」（途中で発話がさえぎられている）

b. 同じく井戸の話

ainuka　hoosu=je　kikai φ　mee　maasi=n　sii

こんな？　ホース=感嘆？　機械　FIL　回し=も　して

「これだけのホースよ、機械を回しても（2 つ回しても水は消えないよ）」

これら 2 つの例は現在のところ説明ができないが、フィラーのようなものが挿入されているようである。今後例数を増やして類例が増えるかどうか確認したい。

以上のように、黒島方言は他の近隣の方言とは異なり、目的語の無助詞が基本的とはいえない、ということを示した。

なお、ba と動詞の隣接は 160 例中 152 例（89%）であり、これも無助詞に近い確率で動詞と隣接しているが、上記の無助詞のような説明はできない。（たとえば、「水 ba 石垣から運んで」「それ ba いちいち帳簿に書き取って」「それ badu 家々の親たちが言っていらっしゃったので」など）

一方、ju と動詞に関しては 64 例中 21 例（33%）が非隣接であった。この点については、動詞との非隣接性と ju との連関はありそう、と言えるかもしれない。

3.2. ju と ba の違い

本節では目的語に後続する ju と ba の違いを、暫定的に、述べる。現在のところはっきりしている唯一の大きな違いは、統語的制限である。ba 目的語はいわゆる連用形、それに由来すると思われるかたち、そしてテ形が構成する従属節にのみ生起する。つまり、おおざ

っぱに言うと従属節にしか ba は生起しえない。これに対し、ju にはそのような制限はない。

ba は 160 例確認されたが、実にこのうちの 157 例が上記の条件にあてはまる。例外を以下にあげる。

(17) a. （配合飼料というものは食べず）

usjee　un=ba=du　sukurka

牛は　芋=ba=FOC　作ると

「牛は、芋を作ると、（芋を刻んで食べさせて牛飼いもしたけど）」

b. （（妊婦には）鳥を食べさせて）

eejoo=ba　sukuba=du　naru=ti　izi

栄養=ba　つけなければならない=QUOT　言って

「栄養をつけなければならない、と（鳥なども準備をして）」

c. mai=nu　ubon=ba　in=ha　pusukku　batasitara

お米=GEN　ご飯=ba　犬=ALL　一個　渡したので

おにぎりを犬に一個渡したので

ちなみに、これらの例も従属節であるため、今回の資料から得られた ba はすべて従属節内であった。

これに対し、ju は 64 例中 18 例（28%）が主節もしくは引用節であった。さらに、そのうちには命令、禁止、意志なども含まれる。ちなみに、ju も連用形などを含む従属節内にも生起しうる。これらのことから、統語的制限を受けない目的語に後続する助詞は ju である、ということがわかる。

ただし、これだけで十分に ju と ba の違いを示せたわけでは当然ない。今後は、ju と ba の統語的条件を揃えたサンプルで検討を進めたい。

3.3. 黒島方言の特徴

すでに指摘したとおり、黒島方言の目的語は無助詞が基本とは言えない。これは、八重山語諸方言のなかでは極めて特徴的であるといえる。今回取り上げられなかったが、ba が自動詞主語に後続する例があること（談話中ではたったの 1 例であるが、日常的にはかなり聞く）も考え合わせると、他の方言で無助詞となっているところに黒島方言は ba を用いている、と考えることもできる（S の無助詞も考慮に入れなければならないが）。これは、有標の助詞を用いながらも、下地 (2015) が指摘した分裂自動詞性を保っている状態、とも言える。また、黒島方言の目的語の無助詞を統語的に制限されたものと考えるとすると、黒島方言は Iemmolo and Klumpp (2014) の言うところの symmetric（対称的）な DOM であると言える。つまり、無助詞と有標の助詞の交替である asymmetrical （非対称的）DOM であった時代があったとすると、黒島方言は非対称的 DOM から対照的 DOM への変化を遂げた、ということができる（それはふつうなできごとのような気もするが）。

参考文献

伊豆山敦子 (2002) 「琉球・八重山（石垣宮良）方言の文法」真田信治編『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究　消滅に瀕した方言誤報の緊急調査研究 (1)』343-461, 大阪：大阪学院大学

金田章宏 (2009) 「沖縄西表島（祖納）方言の格ととりたての意味用法」『琉球の方言』33 法政大学

下地理則 (2015) 「琉球諸方言における有標主格と分裂自動詞性」『方言の研究』1

中川奈津子・タイラーラウ・田窪行則 (2016) 「八重山語白保方言の文法概説」狩俣繁久編『琉球諸語記述文法Ⅱ』1-60, 沖縄：琉球大学

中松竹雄 (1976 (2001)) 「八重山方言の文法―竹富町黒島方言の助詞の形態と用法―」井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編 (2001)『日本列島方言叢書 34 琉球方言考 7 先島 (宮古・八重山他) 』398-409 (338-349), ゆまに書房

西岡敏・小川晋史 (2011) 「竹富方言の音韻・文法概説」前新透『竹富方言辞典』石垣：南山舎

野原三義 (2001)「八重山竹富町黒島方言の助詞」沖縄国際大学南島文化研究所編『八重山、竹富町調査報告書 (3) 』87-111

平山輝男など (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院

松田謙次郎 (2000) 「「東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的要因の数量的検証」『国語学』51 (1)

宮城信勇 (1992) 「沖縄・石垣方言の助詞「ユ」」『沖縄文化』27 (2) 沖縄文化協会

宮良信詳 (1995) 『南琉球・八重山石垣方言の文法』東京：くろしお出版

ローレンス・ウエイン (2000) 「八重山方言の区画について」石垣繁編『宮良當壮記念論集』547-559, ひるぎ社

Aso, R. (2010) Hateruma. In M. Shimoji and T. Pellard (eds.), *An Introduction to Ryukyuan Languages*, 189-228,Tokyo: ILCAA TUFS

Iemmolo,G. and G. Klumpp. (2014) Intrduction (for the special issue ‘DOM’) *Linguistics* 52 (2). 271-279.

Lawrence, W. (2012) Southern Ryukyuan. In N. Tranter (ed.), *Languages of Japan and Korea*, 381-411, London: Routlege.

Sinnemäki, K. (2014) A typological perspective on Differential Object Marking. *Linguistics* 52 (2). 281-313.

以下、まとめられなかったこと。

★軽動詞の場合は ba。sentaku=ba sii

★O と V の倒置 2 例：2 つは ju。1 つは a。

・たいがいの牛が来て飲んだよ、井戸の水 ju

★黒島の ba は定ではない。「おにぎり ba 三つ作って」

★A に焦点標示 du が続く場合、NPnudu のみがあり、NPdu は見つからなかった。